

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 53 回 第 11.2.5.2 節～第 11.2.7 節

2020 年 3 月 1 日

小 田 勝

補遺稿第 50 回、第 51 回の補足から。次例の主名詞は、連体修飾節中の「氷」に対して連体格（「の」格）になっている。

- ・吹く風に氷とけたる池の魚千代まで松の蔭に隠れむ（大鏡）

次例の下線部は、322 頁用例(1)～(13)と同様に、「男子無き〔人ノ〕財宝」の意であるが、傍点の「その人」はその補われるべき人を指している。

- ・もし男子無き財宝をば、その人死ぬれば皆、公納め取らる。（今昔 2-33）

また、前回の補遺稿（第 52 回）で新設した「11.2.5.1' 限定語反転」であるが、見立ての表現に用いられる「BのA」も、「AのようなB」の意を表すので補記する。

- ・天の海に雲の波立ち月の船 星の林に漕ぎ隠る見ゆ（万 1068）
- ・空の海 霞の網はかひぞなきかけても止めぬ春のかりがね（永享百首）

さて、329 頁「11.2.5.2 句を受ける「の」」からである。用例(1)～(11)の類例、

- ・丹波道の大江の山のさね葛〔絶えむ〕の心我が思はなくに（万 3071）
- ・「さる心して世を過ぐせ」とのたまひおきしは、[かかることもやあらむ]の諫めなりけり。（源・総角）

330 頁用例(16)の類例をあげる。

- ・染め残す梢もあらじ村時雨なほ飽かなくの山めぐりかな（新勅撰 350）

「11.2.5.3 連用の「の」」の 331 頁の用例(1)～(4)について、「例のごと」という表現もある。

- ・女御、更衣、みな例のごと候ひ給へど（源・濤標）

用例(9)の類例をあげる。

- ・さらば世の譬の、後の親をそれと書いて、おろかならぬ心ざしのほども、見あらはして給ひてむや。（源・胡蝶）

次例の「よその」「いづこの」「何の」は、「よそに」「いづこに」「何に（＝ドウシテ）」の意である。

- ・暮れゆくとよそのほのかに聞きしかど我が身を越ゆる年ならなくに（好忠集所収源順百首）
- ・いづこのさる女かあるべき。（源・帚木）
- ・なりも出でぬこの身（＝「木の実」ヲ掛ケル）と思ふに何のみて月日に添へて倦み（＝「熟み」ヲ掛ケル）をよむ（＝「数える」意ト「詠む」ヲ掛ケル）らん（散木奇歌集）

用例(10)(11)の類例をあげる。

- ・世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も恋しかりけり（古今 475）

「名詞＋の＋名詞」でも、「の」が「ような」の意を表すことがある。

- ・竜の（＝竜ノヨウナ）馬も今は得てしか（万 806）
- ・大将のをかしやかにわららかなる気もなき人に〔玉鬘ガ〕添ひみたらむに（源・真木柱）
- ・いかにせん花に山風吹きぬなり物思へとの（＝物思イヲシロトイウカノヨウナ）み吉野の春（後鳥羽院御集）

332 頁 1 行目、初刷・第 2 刷の「係り方は」を、第 3 刷で「係り方の」と改めた。

334 頁「11.2.7 終止形・連用形による連体修飾」。日本語文法学会の懇親会で、未知の若い方から、用例(3)の「知らず顔」について、この「ず」は連用形ではないかとの質問を受けた。たしかに「知り顔」（枕 78）と一対の語であるから（現代語でも「泣き顔」「笑い顔」などという）、連用形とも考えられようが、その時には、「そうすると、「負けじ魂」（源・玉鬘）、「負けじ心」（蜻蛉）などの「じ」も、連用形として立てなければならなくなりませんか」と返答したのであった。どう考えたら良いのだろうか？ 終止形と考えるなら、次例の「…り」もこれに連動して終止形ということになるだろうか。

- ・知らざることを知れり顔にもてなさず（十訓抄 6-29）

「…ず＋名詞」では、「とりあへずごと（＝トッサニ思イツイタ用事）」（大鏡）という連語もある。形容詞の場合は、「心地よ顔」（大鏡）、「まさなごと」（徒然 176）のように、語幹が立つ。

用例(5)(6)のような「連用形＋名詞」では、次のような例もある、

- ・つつじ花にほえ娘子〔尔太遥越壳〕 桜花栄え娘子〔佐可遥越壳〕（万 3309）

「かくゆゑに〔如是故尔〕」（万 305）、「かくさまに〔可久左麻尔〕」（万 3761）では、副詞が名詞に連なっている（副詞・連体詞共用の現象は本書 335 頁参照）。

[出典追加] 永享百首②1434 年③新編国歌大観 4